

# 2020年度 JFA社会貢献委員会 活動報告書

March 8, 2021

Japan Football Association

# JFA





公益財団法人日本サッカー協会  
理事・社会貢献委員会  
委員長 日比野 克彦

## 社会貢献委員会 委員長からのメッセージ

### 社会貢献は人が生きるための本能

現代社会において「社会貢献」という意識・行動は個人においても企業、各種団体においても私たちの日常から外すことのできないものになってきています。私たち人間はこの地球上に誕生して以来、様々な環境の中で生き抜いてきました。大自然に対して無力の人間だったが故に、知恵を出し合い、成長し、知識を積み重ね、継承し、進化してきました。そして地球上に現在の姿を築いて来ました。しかし21世紀になり、地球の温暖化等の環境問題が深刻化し、生態系崩壊、食糧危機などの多くの社会的課題が一刻の猶予も許されない状況になり、目の前の引き戻れない問題として突きつけられています。大自然に対して無力であったはずの私たちは、いつのまにかそうではなくなっていたのです……。そしてその背景には産業構造、社会格差、人権意識、などがその起因となっているのです。今一度、私たちはこの地球上で生き抜いていくために、知恵を出し合わなければなりません。その重要な視点が「社会貢献」なのです。自己本位にならず、互いのことを考える、想像することが大切なのです。しかし、情報として知っていても、頭で理解していても、いざ行動しているか？と自問自答すると、難しく、直ぐに大きく世界の状況が変化するかというと、この先の道は険しいものがあるというのが現状ではないでしょうか……。そこでその課題に対して大切になってくるのが、社会貢献の活動に「喜び」を感じ、無理なく行動できるようにするというのではないかと考えます。頭で考えて行動するのではなく、自然と体が喜びを感じて動いてしまうということ、意識せず行動するという。そうなった時に初めて、その活動を継続することができ、私たち人間が地球と共存しうるようになるのではないかと……。では、自然と体が動いてしまうには、どうすればいいのでしょうか？

そこで重要になってくるのがスポーツ、アートという領域が持っている人間の本能的な感性なのです。人間は、丸いものに愛を覚え、転がるものに目がとまる、ボールが転がってきたら、追いかけてくなり、こちらにボールが転がってきたら蹴りたくなってしまいます。そして、こちらを見ている人がいたら、その人にパスしたくなるのです。花を見たら「きれいだな」と思い、花をもらったら「うれしいな」と感じるのです。

JFAがサッカー文化を通して「社会貢献」を発信するということは、生きる喜びを感じるスポーツ・アートによる、人が生きて行くための本能としての行動なのです。私たち人間が地球上で生き抜いてきたこれまで以上の時間をこれからも生きて行く為に、JFAの活動が社会に貢献し人々の心の奥に響くことが大切なことだと考えています。

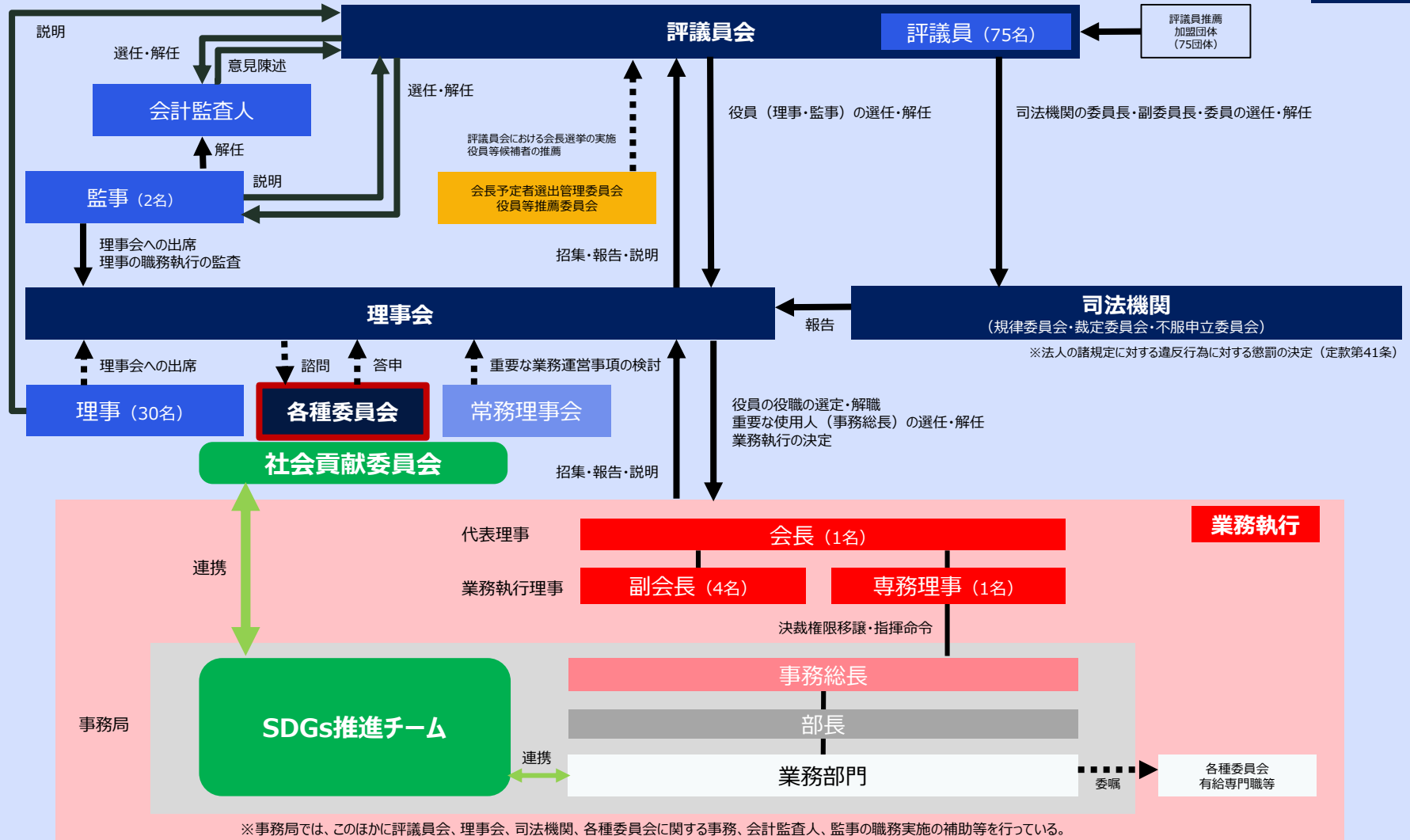
# 社会貢献委員会の概要

委員会の種類	専門委員会（各種委員会運営規則第3条に基づき設置）
設置	2016年3月
所管事項	社会貢献に関する事項
委員長	<b>日比野 克彦</b> JFA理事／国立大学法人東京藝術大学美術学部長
委員	<b>国谷 裕子</b> ニュースキャスター <b>里崎 慎</b> デロイト トーマツ ファイナンシャルアドバイザー合同会社 <b>鈴木 順</b> Jリーグ <b>宮城 治男</b> 特定非営利活動法人エティック （現在の委員は、2020年5月の理事会で選任され、任期は2022年3月まで）
開催日程	2020年7月3日、17日、11月9日（計3回、オンラインで開催）
主な活動	東京藝術大学との連携 国連グローバル・コンパクト活動 寄付月間 子供の未来応援国民運動 子ども宅食プロジェクト 社会的インパクト評価（ほか）

# JFAのガバナンス体制図

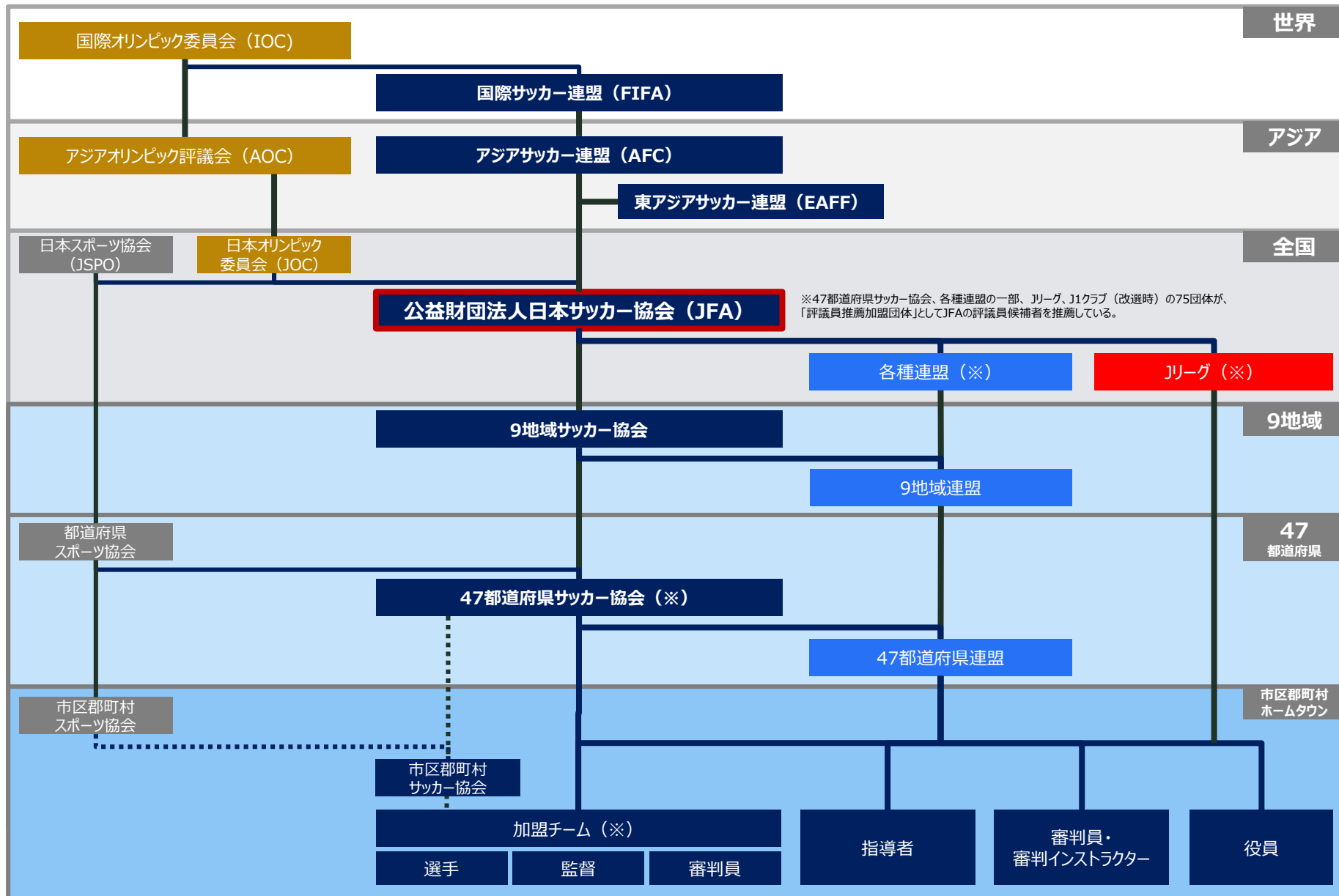
## 公益財団法人日本サッカー協会

監督



※事務局では、このほかに評議員会、理事会、司法機関、各種委員会に関する事務、会計監査人、監事の職務実施の補助等を行っている。

# JFAの関連組織図

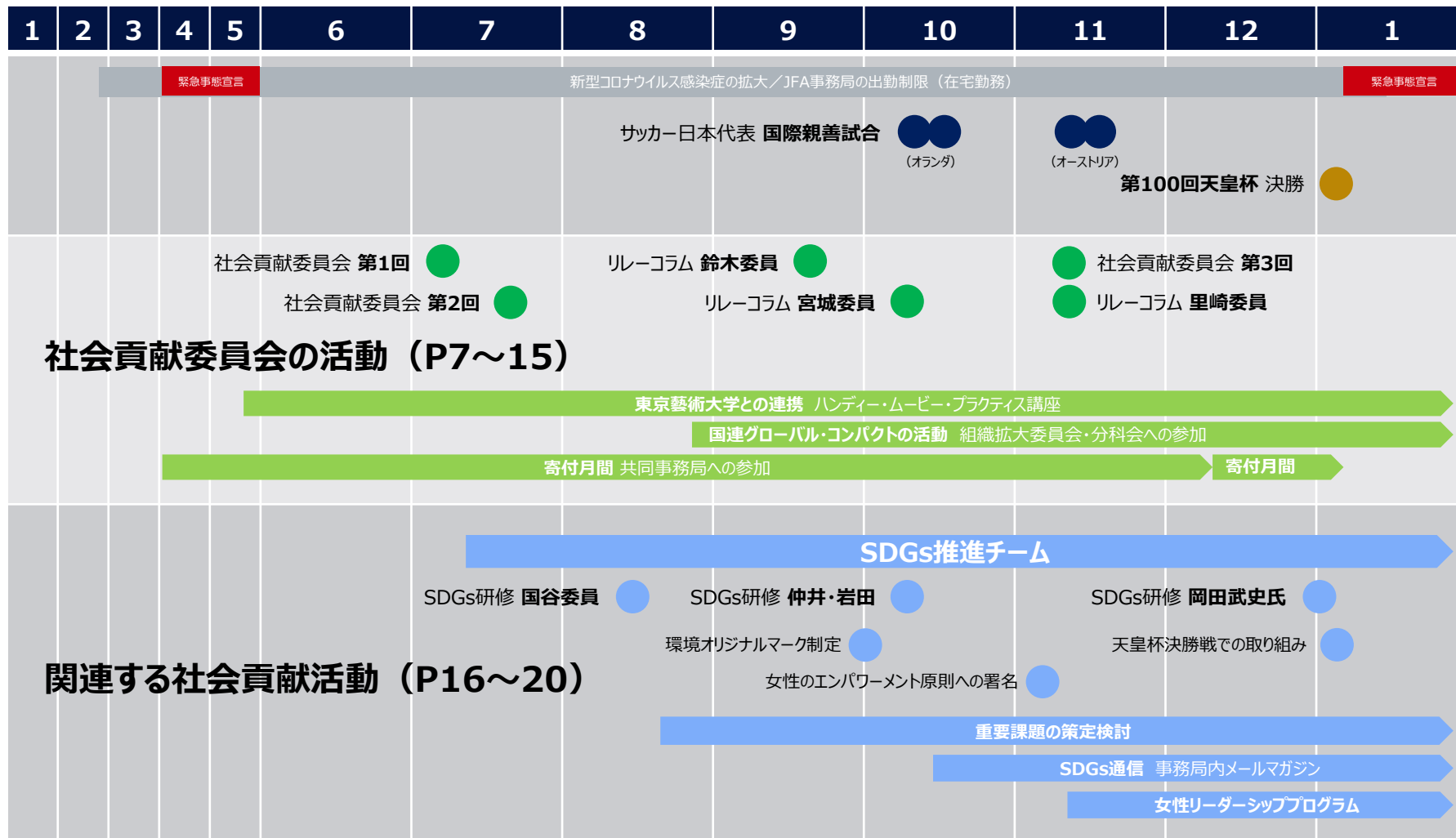


# タイムライン

社会貢献委員会は、JFAの役員改選に合わせて新たに4名の委員を迎えました。新型コロナウイルス感染症の影響により、会議はすべてオンラインで行いました。夏には事務局内にSDGs推進チームが発足し、社会貢献委員会や事務局内の各部署と連携しながら取り組む体制ができました。委員会では、同チームの取り組みがより持続可能な社会の発展につながるよう、アドバイスをを行いました。

2020年

2021年



# 社会貢献委員会の活動

## JFAの理念

サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、  
人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。

社会貢献委員会は、この理念を具現化するための  
持続可能な社会の発展への貢献について考えています。

# CSRリレーコラム

社会貢献委員会の活動をサッカーファミリーの皆さんへお知らせするために、2019年から委員によるリレーコラムをJFA公式サイトへ掲載しています。2020年度は3人の委員のコラムを発信しました。

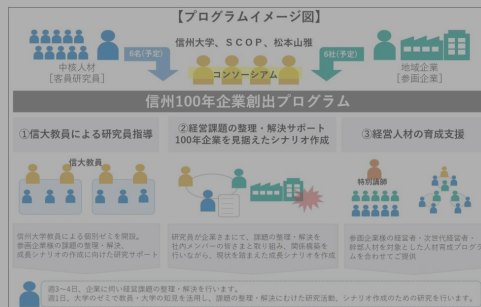


9月18日  
鈴木委員

写真提供：大

Jリーグ社会連携のこれから

[https://www.jfa.jp/social\\_action\\_program/me/football\\_contribution/news/00025266/](https://www.jfa.jp/social_action_program/me/football_contribution/news/00025266/)



10月9日  
宮城委員

サッカーを通して地域の  
課題解決の担い手を増やす

[https://www.jfa.jp/social\\_action\\_program/me/football\\_contribution/news/00025471/](https://www.jfa.jp/social_action_program/me/football_contribution/news/00025471/)



11月9日  
里崎委員

サッカーにおける  
社会貢献活動の意義

[https://www.jfa.jp/social\\_action\\_program/me/football\\_contribution/news/00025667/](https://www.jfa.jp/social_action_program/me/football_contribution/news/00025667/)



# CSRリレーコラム

## 第1回

2020年9月18日掲載

「Jリーグ社会連携のこれから」

鈴木 順 委員



Jリーグの社会連携は、2018年、Jリーグが25周年を迎えるにあたり出発しました。コンセプトは「Jリーグをつかおう。社会のために。」

Jリーグは全国39都道府県に56クラブあります（2020シーズン現在）。その56クラブが「ホームタウン活動」と称し、合計で25,000回を超える活動をそれぞれの地域で行っています（2019シーズン終了時点）。これだけの回数をJクラブが地域で行っていることはあまり知られていません。25,000回を一クラブあたりだと約450回にもなります。どのホームタウン活動もとても大切なものですが、クラブだけで実施するには限界があります。そこでJリーグは、Jリーグクラブだけが主体者となるのではなく、思いや課題意識を持った方が主体者となり、たくさんの方々と手を取り合い、それぞれが持っている得意分野やリソースを活用し、Jリーグクラブを地域のために、社会のために使ってもらう社会連携活動「シャレン！」をスタートさせたのです。

そのシャレン！活動も今年で三年目となりました。リーグとクラブが連携しながら、時に模索しながら、進んできました。今年は初めて「Jリーグシャレン！アウォーズ」と題して、各クラブが実施してきたシャレン！活動を紹介し、社会に共有するイベントも開催しました。新型コロナウイルスの影響で実施はオンラインとなってしまいましたが、たくさんの方に56クラブのシャレン！活動をご覧いただけたことは、Jリーグクラブの社会的価値をサッカー界のみならず、サッカー界以外にも発信できたのではないかと考えております。

今年は新型コロナウイルスの影響で、Jリーグの試合自体も開幕、再開が遅れたり、観客制限があったりと、いつもと違うシーズンを送っています。一日も早く、たくさんのファン・サポーターで埋まるスタジアムを取り戻せるように、新型コロナウイルス感染の終息を願うばかりです。

当たり前前にできていたサッカーができない。そんな今までにない経験ではありますが、そんな時だからこそ、我々は応援いただいているスポンサーの皆さま、自治体の皆さま、ファン・サポーターの皆さま、そして地域の皆さまに対して何ができるのか、また一緒に何ができるかを考える機会になりました。

シャレン！の定義は「共通の社会・地域課題」を「三者以上の連携」によって解決していくこと、としています。誰もが誰かのために、「お互いさま、おかげさま」の共助の思いを持って活動していきたいと思っています。ぜひ皆さまが「こんな課題を解決したい！」「そのためにJリーグクラブをつかいたい！」と思っていただければ嬉しいです。

# CSRリレーコラム

## 第2回

2020年10月9日掲載

### 「サッカーを通して地域の課題解決の担い手を増やす」

宮城 治男 委員

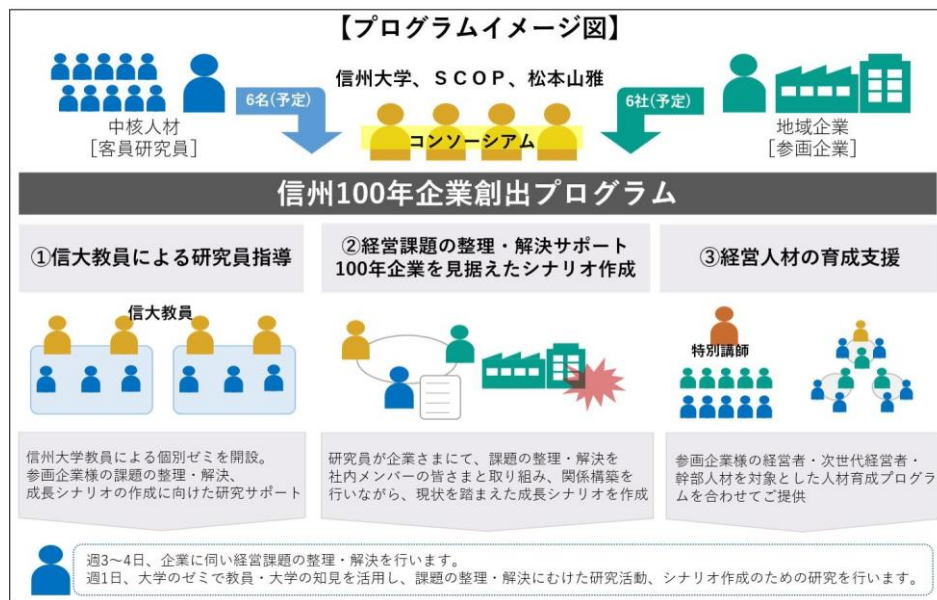
私が代表理事を務めるNPO法人ETIC（エティック）では、2004年から全国のパートナー団体と連携して地域の課題解決の現場に人材を送り込んでいます。特に2011年の東日本大震災以降は、東北をはじめ各地の経営者のもとに人材を右腕として送り込む取り組みを実施し、地域の中に新たな事業が生まれています。地域の中で地域資源を活用した産業を生み出し、新たな雇用を創出している人材も多くなります。そうした課題解決の担い手となる人材が増えることは、地域の持続可能性に直結します。

課題解決の担い手になるためには、地域への愛着や当事者意識が必要です。しかし、出身だからといって必ずしも愛着が生まれるわけではありません。これまでの文脈を踏まえ、新しいコミュニティに入り込めた感覚が生まれてはじめて愛着が生まれます。逆に言えば、出身者でなくともそういった経験をした人物はその地域の課題解決の担い手になる可能性が高いのです。

さらに、地域に愛着をもって動き出した人材をサポートし、応援する関係性があれば、彼らの動きはより持続的なものになっていくでしょう。こうした地域の課題解決に取り組む人材とそれを支える地域の基盤の重要性は、年々高まっています。

こうした課題解決人材と地域をマッチングさせる取り組みの一つとしてETICでも「信州100年企業創出プロジェクト」にサポーター企業として関わっていました。

信州大学が中心となって実施しているこのプロジェクトは、都市部で働く経営人材を地元企業にマッチングし、信州大学でのリカレント教育とともに経営人材の育成と企業の課題解決を目指しています。



# CSRリレーコラム

## 第3回

2020年11月9日掲載

### 「サッカーにおける社会貢献活動の意義」

里崎 慎 委員

スポーツと社会貢献活動は、密接な関係にあるというのが一般的な皆さんの認識だと思いますが、それは何故でしょうか？

この問いを真正面からされると、回答に窮してしまう人も少なくないのではないのでしょうか。一方で、回答できないからと言ってその認識が誤りだと言えないのも事実だと思います。よく言われる一つの回答としては、「スポーツという活動自体が準公共的な性質を有しているから」というものがあります。

分かりやすいのが、スポーツを実施する会場、“ハコ”です。もちろん、ランニングやサイクリング、マリンスポーツのように特別なハコを必要としないスポーツもありますが、特に正式な試合では、競技場や体育館といったハコが必要となります。そして日本では多くの場合、競技場や体育館などは地方公共団体等が所有しており、その建設には多額の税金が投入されています。このことはすなわち、地方公共団体等がスポーツというコンテンツを住民の心身の健全性を確保するために必要なもの（公共的なもの）と認めたために成り立つ関係であることを示しています。これがスポーツという活動が準公共的な性質を有すると言われる根本的な構造になっています。

このように、スポーツという活動自体が準公共的な性質を有する以上、それに携わる団体や構成員が社会的な活動をするにもある意味必然と言えるわけです。スポーツ団体にアカウンタビリティ（説明責任）やコンプライアンス（法令順守）が強く求められるのも、準公共的な性質に鑑みれば、当然のことと考えられます。スポーツが社会貢献活動を実施する意義・根拠を上記のロジックに求めれば、冒頭の問いかけに関する回答としては十分なようにも見えます。しかし一方で、スポーツが社会貢献活動を実施する意義・根拠が「社会的要請のみ」で良いのか、という点についてはもう一步踏み込んだ議論が必要だと感じています。

私は、スポーツ団体が実施する社会貢献活動は本来、能動的に実施することで真に意味のある活動になるものと考えています。なぜなら、この「能動性・主体性」というマインドこそ、スポーツコンテンツの価値の源泉であるスポーツマンシップに通じるものだからです。

スポーツマンシップという言葉も、ほとんどの人が聞いたことのある言葉であるにも関わらず、真正面から意味を聞かれると回答に窮してしまう代表的な単語の一つかと思います。一般社団法人日本スポーツマンシップ協会のHPによれば、スポーツマンシップとは「Good Gameを実現するための心構え」とされており、その構成要素として①Respect：相手、仲間、ルール、審判に対する尊重、②Braveness：責任をもって決断する勇気、③Resolution：勝利をめざし、自ら全力を尽くして楽しむ覚悟（これが「能動性・主体性」に該当）、が挙げられています。

この3要素は実は、人々が豊かな人生を送るため、言い換えれば人々のQOL（Quality Of Life）の最大化に不可欠な要素と言えます。スポーツはその活動を通じてQOL最大化に不可欠な要素を自然と体得できる活動であるため、試合や競技に限らず、多くの人々がその活動に触れる機会を「能動的」に広げていくことは非常に重要な意味を持っています。

そのように考えていくと、数あるスポーツの中でも、特にサッカーが社会貢献活動をする意義は大きいと考えられます。理由は以下の3つです。

①関係者数が世界・国内最大規模  
W杯の予選に参加した国・地域は200か国以上というワールドワイドな競技であり、競技者だけでなく、スポンサーや視聴者等も含めると、国内はもちろん、世界中の人々に影響を与えることが可能。

②各種ライセンス制度が整備  
競技者やクラブのライセンスに加え、指導者ライセンスを有していることから、社会貢献活動の意義や競技団体としての考え方をより正確に関係者に伝えることが可能。

③準公共的な全国組織体制  
スポーツ競技団体という準公共的な組織でありながら、能動的・主体的に活動可能な全国組織体制が整備されており、自治体や教育機関とのハブ機能を発揮することが可能。

以上から、JFAが実施する社会貢献活動は、サッカーに関わる全ての関係者のQOLを高めていくための重要な活動であり、JFA自身の存在価値・意義を確固たるものとし、持続可能な発展を実現するために必要不可欠な取り組みであると、私は考えています。

皆さんも、是非JFAの社会貢献活動に参加してみたいかかでしょうか。

# 東京藝術大学との連携

東京藝術大学との連携協定に基づき、「ハンディムービー・プラクティス」の講座で受講生がJFAの社会貢献活動を映像で表現しました。

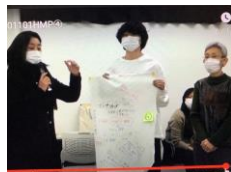
5月24日

2020年度開講  
日比野委員長より  
これまでの取り組み  
内容を説明



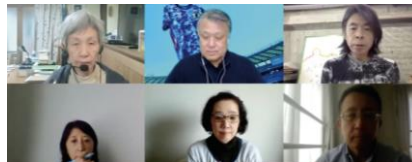
7月19日

3名 x 5グループに分け  
各映像のテーマを設定  
前期終了



10月11日

後期開講  
田嶋会長、藤川戦略企画・人事・  
情報システム部長より改めて  
JFAの取り組みについて講義



© 東京藝術大学 Diversity on the Arts Project

11月29日

JFA夢フィールドで  
映像を撮影



2021年1月17日

作品発表

社会人10名、学生5名の計15名が受講。前期はオンライン中心の講義で、素材の加工や編集などの技術的な内容となりました。後期は前期で学んだ技術を駆使し、3名ずつ5グループに分かれて映像製作の実習を行いました。

## 日比野委員長（東京藝術大学美術学部長）コメント

今年度はコロナ禍の影響で十分な取材を行うことが困難でしたが、スポーツとアートの領域を横断する授業として、人間らしさの魅力を伝える意義ある活動ができました。サッカーというスポーツにおけるアート、そして社会貢献とサッカー、そしてアート、これらをつなげることにより、これまでの概念では気がつかなかったスポーツの課題、アートの課題に対しての眼差しを見つけて行きたいと考えています。

# 文京区との連携

文京区の「こども宅食プロジェクト」へ協力を継続しました。



7月

サッカー日本代表夏休み特別オンライン授業（8月）の  
参加案内を実施



11月

サッカー日本代表のグッズを配布



12月

2017年から行っている子ども宅食プロジェクトへの協力を継続しました。  
貧困問題は、支援を受けていることを周囲に知られたくないという思いから、見えづらいという課題があります。  
新型コロナウイルス感染拡大により苦しい状況となる家庭が増える中、対象世帯であることが気づかれない  
ような形での協力を行いました。  
この取り組みによって、子どもたちにスポーツとのつながりが新たに生まれ、心身の健全な発達に必要な貴重な  
経験をできる環境を作ることができると期待しています。

# 国連グローバル・コンパクトの活動

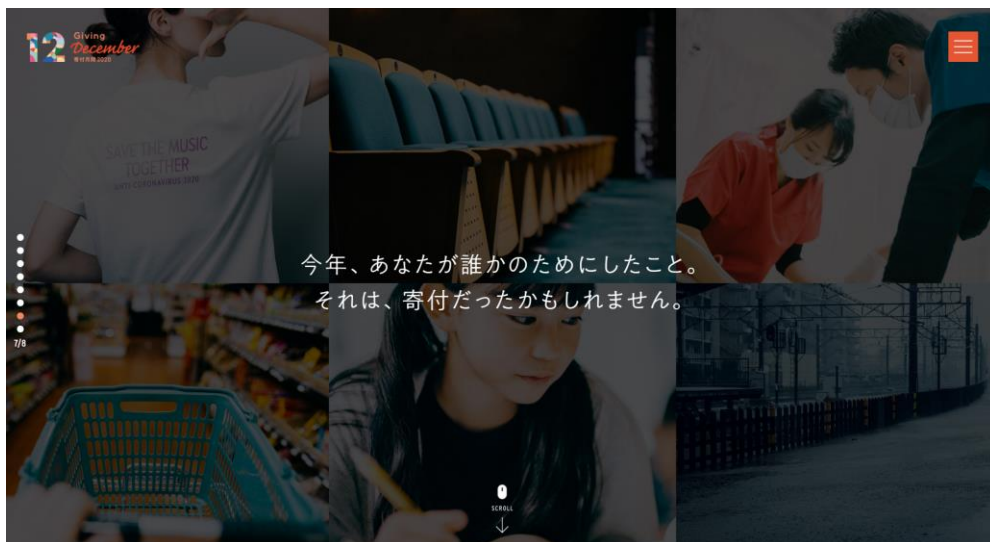
JFAは、SDGsを積極的に推進している世界的なイニシアチブである国連グローバルコンパクトに2008年に署名し、様々な活動に参加してきました。



組織拡大委員会	グローバル・コンパクトネットワークジャパンの組織拡充に向けた企画立案、イベント実施等の取り組みを行う専門委員会へ職員が参加。		
SDGs分科会	SDGsの様々なテーマについて意見交換を行う分科会に職員が参加。約160団体、230名が参加しています。	<b>第1回 7月9日</b> 趣旨説明、メンバー自己紹介 <b>第2回 9月29日</b> SDGsと経営をつなぐ <b>第3回 10月26日</b> パートナーシップ <b>第4回 2021年2月10日</b> ユースと考えるSDGs	サブチームとして「最新動向チーム」が8月から隔月でオンラインミーティングを行い、分科会へ情報を展開。
CSV分科会	CSV（共通価値の創造）について深く理解し、実践できるよう学ぶ分科会に職員が参加。約40団体、100名が参加しています。	<b>第1回 7月15日</b> CSVの基礎と最新動向について <b>第2回 9月16日</b> LIXILの事業を通じた衛生課題解決 <b>第3回 11月16日</b> 味の素グループのASV経営 <b>第4回 1月14日</b> 三井化学のCSV推進と経営への組込み	
未来への羅針盤	2050年のあるべき社会像、それを実現するための日本企業のロードマップ指針を策定するプロジェクト。グローバル・コンパクトネットワークジャパンの加盟団体から20～30代の有志が参加し、JFAから職員2名が参加。成果物は一般公開され、企業のマテリアリティの特定や、中長期計画・SDGs計画作成などに活用される予定。		

# 寄付月間

寄付月間（Giving December）は、寄付を通じたよりよい社会づくりを願う様々な人々が毎年12月、全国一斉に行っているキャンペーン。NPO、大学、企業、行政などあらゆる団体がこのキャンペーンに賛同し、それぞれの団体ごとに公式認定企画と呼ばれる独自の取り組みを行っています。JFAも、2016年からこの寄付月間の「賛同パートナー」として参画し、スタジアムでの啓発活動などを通じて、サッカーファミリーによる寄付文化醸成に貢献しています。



リニューアルされた寄付月間公式サイト (<https://giving12.jp/>)



キックオフイベントの様子（YouTubeより）

<https://www.youtube.com/watch?v=HwphZrKSp90>

2020年度は、寄付月間共同事務局へ職員1名が参画しました。

コロナ禍の影響を受けて、リアルでのイベント開催が難しく、困難な状況に置かれた法人や団体も多い中、全国各地で寄付月間認定企画が200件以上行われました。

キックオフイベントを12月1日にオンラインで開催し、全国各地から100名以上が参加しました。メインプログラムとして、国内外を問わず寄付を通じた活動をしている方々を招いたトークセッションを行いました。

また、第100回天皇杯JFA全日本サッカー選手権決勝の会場で、寄付月間のプロモーション映像を上映し、来場者へ寄付文化の大切さをお伝えしました。



## 関連する社会貢献活動

JFAでは、SDGs推進チームを中心に様々な新しい取り組みが行われています。  
社会貢献委員会は、持続可能な社会の発展への貢献について考える委員会として  
各部門から必要な報告を受け、充実した成果をあげられるよう適宜アドバイスを行っています。



# 天皇杯決勝戦での新たな取り組み

天皇杯JFA第100回大会決勝でJFAは主催大会で初めてSDGs推進活動を実施。エコ製品の推進や省エネを意識した大会運営、また、人混みや大音量への対応に悩みを抱えるお子さんを対象にしたセンサリールームの設置など、持続可能性に配慮した施策を実施しました。なお今回の各種施策は、新型コロナウイルス感染拡大防止のガイドラインを順守して行いました。

## ファン・サポーター向け



### エコ製品の使用推進

今大会の来場者へ「環境に優しいことを示すオリジナルマーク」を表示したエコバックをプレゼント。製品素材に環境負荷が少ない再生ポリエステルを使用。



### 環境に配慮したスタジアムサービス

会場の飲食売店を運営する事業者の皆さまの協力の下、プラスチックごみの排出に配慮し、ストローやマドラー等の消耗品は紙素材に代替しました。また、各事業者において、集客見込みに応じた仕入れ量の調整や、販売できなかった食品の堆肥・飼料としての活用など、フードロス削減を推進するオペレーションを実施しました。



### センサリールームの設置

“誰一人取り残さない”天皇杯を目指し、感覚過敏や発達障がいなどの障がいのあるお子さんとご家族2組を、仮設のセンサリールームでの観戦にご招待しました。また、JFA職員も有志で運営にあたりました。



### JFA SDGsブース出展・メッセージ映像の発信

共にSDGsに取り組んでいただくことを呼びかけるブースを出展。サッカーやスポーツを通じた社会貢献、これまでのJFAのSDGsの取り組みや、会場となる国立競技場が持つ環境負荷低減機能等の紹介をはじめとした展示等を行い、JYDパートナーである株式会社モルテンとともに、エコ素材を用いた組立式ボール「My Football Kit」を展示しました。

また、スタジアムビジョンでは、天皇杯100回大会でのSDGsの取り組みを来場者の皆さまに知っていただくメッセージ映像を放映。映像ではJFAの「SDGs推進チーム」のメンバーである播戸竜二氏（元日本代表）がナビゲーターを務めました。

## パートナー・組織内での取り組み



### 大会オペレーションのエコ化 エコを意識したホスピタリティの実施

大会オペレーションや、主に来賓向けのラウンジの運営を見直し、印刷物やゴミの削減、会場運営におけるエネルギー管理の実施など、資源を守り、無駄をなくした上でのより円滑な大会、試合運営を目指しました。

### 取り組み評価

SDGsに組み込み、環境に配慮して運営する初めての大会として、ゴミのリサイクル率や再生可能エネルギーの使用率、スタジアムにおけるCO2排出量、食品ロスの削減量等の指標の設定及びその測定に取り組みました。取り組みの成果や課題を把握することで、今後の継続的な取り組みに生かします。



# 女性リーダーシッププログラム

サッカー界・スポーツ界を牽引する女性役員・経営人材を育成するために、JFAとWEリーグが都道府県サッカー協会の役員やWEリーグ参入予定クラブの経営人材候補者などを対象としたプログラムを実施しました。



日本全国から都道府県サッカー協会、WEリーグ等のリーダー候補の女性12名が参加

Module1	2020年10月31日(土)～11月1日(日) JFA夢フィールド
Module2	2020年11月28日(土)～11月29日(日) JFAハウス
Module3	2021年1月30日(土)～1月31日(日) オンライン
Module4	2021年2月20日(土)～2月21日(日) JFAハウス

## 講師を務めた WEリーグ 岡島喜久子 チェア

まず、女性リーダーシッププログラムをJFAとともに開始できたことを大変嬉しく思います。今日は講師として、小さな成功体験を積み重ね自己肯定感を高めていくことの重要性やリーダーとして世界の動向を把握することの必要性をお伝えしました。受講生の皆さんも積極的に意見を述べ、リーダー像をイメージ合っている様子でした。講師、受講生問わず、参加している全員にとって大変有意義な時間になったのではないかと思います。このプログラムをきっかけにサッカーファミリーの中からたくさん女性リーダーが生まれていくことを期待します。スポーツ界で女性リーダーが生まれることは、日本全体にも大きな影響を与えるはずで、受講生の皆さんが核となり、自クラブや所属元の協会にいる男性女性に良い刺激を与えてほしいです。

## 受講生の一般社団法人 佐賀県サッカー協会 宮崎美由紀 副会長

今回も講演や講義、そしてディスカッションとどれも私にとって刺激になる濃い内容ばかりで、日常では、とてもお会いできないような方々のお話はとても勉強になりました。そして、WEリーグは、私達女性・少女達の未来を創ってくれるリーグであることをはっきり確信しました。WEリーグと共に私達にこれから何ができるか。今回の受講で、モヤモヤしていたものがすっきりした感じです。これからも地域FAとして、女子サッカーの未来を創るためにできることを頑張っていこうと思います。(Module3を終えて)

## 受講生の WEリーグ 江川純子 事務局長

各界で女性リーダーとして道を切り拓いてきた方々の経験や知見、講師の方々への洞察力に富んだ問題提起をシェアしてもらえる素晴らしい機会をいただいています。この研修から得た気づきを活かして、Women Empowerment Leagueのビジョンのひとつである「世界一アクティブな女性コミュニティへ」の実現に向けて、人口の半分を占める女性が今以上の比率で関わる環境づくりにできることをしっかり考えたいと思います。3回目の研修では、失敗にめげずバイタリティを持って進むこと、自信の大切さを特に強く意識しました。同期生のみなさんと励まし合いながら、次回の研修に向かいたいと思います。(Module3を終えて)

# SDGsの役職員への浸透

JFAや地域・都道府県サッカー協会事務局で働く役職員向けに、SDGsの理解を深め、実際の行動に移していくことを目的に、講師による研修とメールマガジンの発信を行いました。

## SDGs研修

JFA・9地域・47都道府県サッカー協会の役職員に対するSDGsの理解浸透を目的としたSDGs研修を計3回実施しました。

第1回は社会貢献委員会委員でアナウンサーの国谷裕子さんから、「SDGsとは何か」と題してSDGs全般についてご講話いただきました。

第2回はJFA職員でもあるデフサッカー日本代表の仲井健人さん、ロービジョンフットサル日本代表の岩田朋之さんから、サッカー界における障がいに関するパネルディスカッションを行いました。

第3回は元日本代表監督でJ3のFC今治を運営する株式会社今治、夢スポーツの代表取締役会長を務める岡田武史さんから、地域創生に関してご講話いただきました。

各回とも多くの職員が参加し、SDGsについての理解を深めることができ、実際の行動に移すにはどうしたらいいか考えるきっかけとなりました。

## 参加者の声

- ・JFAがリーダーシップを取りSDGsの活動を推進していく必要があると認識した。日々の一人一人の小さな行動から変えていく必要がある。
- ・競技運営部としては、障がいのある方がいかに来場しやすく、かつスタジアム楽しんで頂けるのか、まずは運営に携わる者全員がそういった視点を持つことが大事だと感じた。
- ・日本が特に達成度が低い目標について、ひとつずつ深堀り講義をして、達成するにはどうしたらいいかをディスカッションしたら面白いと思う。

## SDGs通信（メールマガジン）

SDGsの各ゴールに対する理解の浸透を目的にJFA・9地域・47都道府県サッカー協会等の役職員を対象にメールマガジンを発行しました。

各SDGsのゴールの紹介とともに、国内外のサッカー界の取り組みと最近のSDGsに関するニュースを紹介し、役職員のSDGsに対する理解度向上を図りました。

第1回	2020年9月9日(水) 講師 国谷 裕子さん（JFA社会貢献委員会委員） 「SDGsとは何か」
第2回	2020年10月28日(水) 講師 仲井健人さん・岩田朋之さん（JFA職員） 「SDGsが目指す社会『誰一人取り残さない世界の実現』」
第3回	2020年12月23日(水) 講師 岡田 武史さん（JFAシニアアドバイザー） 「スポーツと地方創生」



**Thank you.**

